

書評

中根允文 著
長崎医専教授

石田 昇と精神病学

酒井明夫

読了直後の感想から述べてみたい。何よりもまず、受けた衝撃の大きさがある。人間存在の深淵を垣間見た思いがすると言っても決して大げさではない。本書の主人公のそれに比肩し得る人生などそうあるものではないだろう。

弱冠 30 歳で精神医学書を出版した優秀な精神科医、雄島濱太郎というペンネームを持つ才能あふれる文筆家、セルバンテスの名著『ドンキホーテ』の翻訳・紹介者、さまざまな治療改革を实践した長崎医学専門学校精神病学教室初代教授、米国医学心理学協会の名誉会員、第一等殺人罪で終身懲役に服する受刑囚、幻聴や緊張病症状を呈する統合失調症患者、これらは皆同一人物である。この人物、すなわち石田昇の生涯を目の当たりにするとき、我々はしばし言葉を失う。仙台で生まれ、熊本から東京、長崎を経て米国メリーランド州ボルティモア、そして再び東京へと戻る彼の足跡には何か強烈な力場が支配しているかのようである。

本書は、将来を嘱望されながら、留学先のボルティモアで妄想にとらわれて同僚の医師を射殺し、有罪判決を受けた後日本に送還され、松澤病院で結核のために亡くなる悲運の精神医学者 石田昇を描いた伝記である。内容は前半が伝記的記述、後半が彼をめぐる資料という 2 部構成になっているが、前半部分にも貴重な写真の数々、新聞記事、石田の著『新撰精神病学』の内容紹介など多くの資料が盛り込まれ、我々は豊かな文脈を追っていくことができる。

主人公の苛烈な人生とはまた別に、本書の記述については二つ重要な点が指摘できる。一つは、資料とその扱いに関することである。著者は入手可能な資料をできる限り多く呈示しようとしているが、そこで特筆すべきは、石田自身の言葉や生活上の出来事など直接的な資料ばかりでなく、彼がかかわりを

持った事柄や人物、興味を抱いていた対象、当時の時代背景が吟味されていることである。石田が関心を寄せていた『ドンキホーテ』と、私淑していたとされるディケンズの作品の類似点が指摘され、我々はそこにこの精神医学者の嗜好性や心性の一端を見ることができる。また、ボルティモアの射殺事件に際して石田が心神喪失とは見なされず、実刑判決を受けたことには、当時の米国社会の日本人蔑視の風潮が影響した可能性などが明らかにされていく。これら一連の考察において、著者は客観性を重視し、あくまでも資料の内容に立脚した推論や仮説を展開して石田の肖像を構築している。こうした方法は歴史研究の鉄則を遵守したものであり、本書の学術的価値を保証するものである。

もう一つは、本書の記述全体を覆う著者の哀悼の念である。著者は「あとがき」で次のように述べている。「彼のことを知れば知るほど、著者が生まれた翌々年の初夏である昭和 15 年 5 月 31 日に 66 歳で死去した石田の底力の大きさを思い知らされる。いかに多くのことを広く、かつ奥深く把握する努力をしていたかに敬服する」。この文章は、本書全体を彩る表現上のトーンとニュアンスを総括している。おそらく著者が感じているのは、並外れた人物に対する敬愛と畏敬の念である。それらは本書を読者にとっても感情移入できるものにしている。

数奇な運命に翻弄された精神医学者は我々を深い洞察へと導かずにはおかない。そして本書はそうした機会を提供してくれる貴重な記録である。本書が精神科医のみならず、多くの人々の目に触れることを願う。

(岩手医科大学)

●B5 336 頁 2007 定価 5,250 円(本体 5,000 円+税) 発売：医学書院